ポケットモンスターＤＰＴ　～輝石の蒼光～

danlick エクリプス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスターＤＰＴ　～輝石の蒼光～

【Ｎコード】
Ｎ３７３６Ｗ

【作者名】
ｄａｎｌｉｃｋ　エクリプス

【あらすじ】
これはポケモンたちの住む世界を旅するトレーナーの一人となった少年
『ヒロト』が自らの夢のためにシンオウ地方を旅していく物語である。

プロローグ（前書き）

初めての小説です。
初投稿を誕生日にしていきなり調子に乗っています…
とてもひどい内容になるかもしれませんがどうか温かい目で見ていただけるとうれしいです。
それではスタートです！

プロローグ

ここはポケモンと人間達がいる世界

この世界にはきっと数え切れないほどポケモンがいるかもしれない人間とポケモンは協力してずっと今日まで生きてきた。

ここ、シンオウ地方のマサゴタウンに住む少年が今大きな人生の一歩を踏み出そうとしていた。

「これで良しと…それじゃあいってきます！」

「がんばるのよ！いってらっしゃい」

母親にいってきますを言って家を出たこの少年、名前は『ヒロト』夢はあのチャンピオンマスター『シロナ』と戦い、そして勝つことである。

ヒロトは町にあるナナカマド研究所まで走り出した。

プロローグ（後書き）

こういう感じでやっていくので最後までよろしくお願いします。
だんだん文も長くしていきます。

次回もお楽しみに

ポケモン初ゲット！！（前書き）

まだまだですがよろしくお願いします。
それでは第二話スタートです！

ポケモン初ゲット！！

ヒロトは研究所へ走り出そうとしたが
「ヒロトー忘れ物してるわよ～」
母親に呼び止められ玄関へとんぼ返り。
「どうしてこれを忘れるかな～」
「ごめんごめん」
そういって母親からきれいな青い石を受け取ったヒロトはそれを大事そうに首にかけ、今度こそ研究所へ走り出した。
しかしヒロトの向かっている方向は研究所ではなく海のほうだった。

「おーいブイゼルー！出発するぞー！」
海岸に着いたヒロトはそう海に言った。
すると海からポケモンが現れた。そのポケモンはブイゼル。
だが、このブイゼルはほかのブイゼルと違ってなんと尻尾が3本あるとても珍しいブイゼルなのだ。

「あっヒロトとブイゼルだ！おはよー」
元気のいい挨拶をしたこの少女名前はアスカ。
「おはよう。ちょっと遅いんじゃない？」
そしてこの少年はジュン。
2人ともヒロトの幼馴染だ。
「おはようヒロト君」
ナナカマド博士もそこにいた。
「さあ皆そろったところで研究所に入ろう。」
博士がそう言ったがヒロトが
「ちょっと待った！皆には俺の初ゲットを見てもらいたい」
そう言った。
すると3人とも

「却下」
「異議あり！何でそうなるの？」
ヒロトは某裁判ゲームのごとく突っ込んだ。
「あはは。ちょっとボケただけさ。」

「さあ気を取り直してゲットだ！」
そう言ったヒロトはバッグからモンスターボールを出した。
「そういえばどのポケモンをゲットするの？」
とアスカが言った。
「俺がゲットするのはもちろんブイゼルさ！ブイゼルいいよな！」
「ブイ！」
「よしいけっ！モンスターボール！！！」

「やった！初ゲットだ！」
「おめでとう」
そう皆が祝福していたら突然ヒロトの持っていた石が光りだした！
「何じゃこりゃあああああ！」

ポケモン初ゲット！！（後書き）

ここで終わりです…
次回で光る石の正体がすこしだけわかります！
次もがんばるのでよろしくお願いします。
あと最後のやつ変えました。

ポケットモンスター～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

ブイゼルが喋った！？（前書き）

お久しぶりです。
なかなか投稿できず申し訳ありませんでした。
これからはがんばって投稿の間隔があかないようにするのでよろしくお願いします

それではスタートです！

ブイゼルが喋った！？

「何じゃこりゃあああああ」
突然光りだした石のせいで研究所はパニックに……
と思っていたのはヒロトだけだったようだ。

「皆大丈夫？」
ヒロトの問いに
「うん！へーき！へーき！」
と恐ろしくのんきなアスカ。
「うむ。」
相変わらず多くを語らない博士。
「……」
ジュンは黙ったままだ。
「おいジュン！どうしたんだよ！」
「……」
「おい！黙ってたらわかんないよ！どうしたんだ…ってこいつもしかして気絶してるんじゃ…？」
「みたいだね」
「どうしよう」

「大丈夫だよ。僕が目を覚まさせるから。」

「ゑ？今アスカなんか言った？」
「いや。いまのだれ？」
「じゃあ博士？」
「いいや違うぞ」
「じゃあいったい誰が……！」
バッチャアアアンと大きな水音がしてまたあの声がした。

「ここにいるだろ！ここに！どうして気づかないかなぁ」

「「えええええええええええ！！！」」

「「ブ、ブ、ブ、ブイゼルが喋ったあああああああ！？」」

「ど、ど、ど、どうして？」

アスカは驚きを隠せていないが…？

「れ、れ、れ、冷静になれ。ＣＯＯＬになるんだ。」

ヒロトは必死で落ち着こうとしているが無駄のようだ。

しばらくしてやっと落ち着いてきた２人はブイゼルを質問攻めにした。

「どうしてぶいぜるが喋るんだ！」

「あのさ…」

「なんだよ」

「質問に答える前にジュンを起こさない？」

「ああ！そうだった！すっかり忘れてた。」

「よーしブイゼル！俺からの最初の指示だ！みずでっぽう！」

「ブイイイイイ」

「うーん……」

「ようやくお目覚めかいジュン君」

「うわあああああああああああ。ブッ、ブイゼルが喋ったあああ！？どうして？」

「詳しくはブイゼルから…」

ブイゼルが喋った！？（後書き）

以上です！
次回は石の話をしてやっとこさ出発するのでお楽しみに。
ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

いざ出発！！（前書き）

第４話です。
なぜブイゼルがしゃべるのか少し明らかになります。
それではスタート！

いざ出発！！

「どうしてブイゼルがしゃべるんだ！」
「詳しくはブイゼルから…」

「どうして僕がしゃべることができるか。　それはズバリそのヒロトが持っている石のせいなのだ！」
「「へー」」
「ちょっ反応薄いなおい！どうしたんだよ！」
「だってさ、急に石が光ってからブイゼルがしゃべったんだぜ？普通石のせいだと思うだろ？な？」
「「その通り」」
「そっ、それはそうか。でもなぜこの石にこんな能力があるのかはわからないだろう。」
「まぁそれはそうだな。」
「で、どうしてこの石がそんな能力を持っているんだ？」
「まぁまぁあせるなよヒロト。今から話してやる。
　それは！」
「「「うん！！」」」
「なんと！」
「「「なんと！！！」」」
「僕にもよくわからないんだ。」

「「「えええええええええええええ！！！！！」」」

「何なんだよ！引っ張っとって！結局知らないんじゃん！」
「ごめんな。でもこれだけは言える。この石の力はヒロトにしか使えない！しかもその力にはヒロトの　父さんも関わっているんだ！」
「まじで！親父が！？」

「そうだ。だからヒロト！お前の父さんは今どこにいるんだ？」
「親父なら修行中だよ」
「どこで？」
アスカはヒロトの父親に興味があるようだ。
「今はわかんないけど、シンオウのどこかにいることも、無事なのも確かだ。」
「どうして無事だとわかるの？」
「だって親父、月一で家に電話くれるもん。俺は携帯も持ってるし。」
「じゃあすぐ見つかるな。」
「電話してよ。ヒロトのパパさんに。」
「いや。コトブキシティについたら電話するよ。」
「どうして？」
「コトブキでちょっとあるからさ。」
「……？」
「何はともあれ、出発しようぜ！」
「「「うん！」」」
「じゃあ博士。いってきます！！」
「うむ」
「それじゃあまずはコトブキシティを目指して出発だ！」
「「「おー！」」」

いざ出発！！（後書き）

次はコトブキシティへ行きます。
そしてあの人も登場する！…かも。

というわけでいつもので閉めます。

ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

初バトル！（前書き）

第5話です。
ついに初バトルです！
それではスタート！

初バトル！

「そうだ！2人ともポケモンもう持ってんだろ？だったらさバトルしようぜ！」

ヒロトの提案に2人は

「「賛成！」」

快く受け入れてくれたようだ。

「じゃあどっちがくる？」

ヒロトは早速バトルモードになっている。初バトルで燃えているようだ。

「じゃあ私がやるよ！よろしくね、ヒロト」

「おう！じゃあやるか！」

「審判はどうする？」

「それならわしがやろう。」

なんと博士が審判に名乗り出た。

「博士がやってくれんですか？」

ヒロトも驚いているようだ。

「いないよりはましじゃろう？」

「それではヒロトＶＳアスカバトル開始！」

「先行は俺からでいいな？」

「ＯＫ」

「よしいけブイゼル！」

「ブイブイ！」

「じゃあ私は、リオル！ＲＥＡＤＹ　ＧＯ！」

「リオ、リオル！」

「いけブイゼル！ソニックブームだ！」

「ブイ！」

「かわして！」

「リオ」

リオルはすばやくソニックブームをかわした。

「今度はこっちの番よ。降りてきたブイゼルにはっけい！」

「リオ」

リオルは素早くブイゼルの着地地点までいき降りてきたブイゼルにはっけいを命中させた。

「ブイイイイ」

「大丈夫か？ブイゼル？」

「ブイブイ！」

「よしアクアジェット！」

「ブイイイイイイイイイ！」

ブイゼルは体に水をまとうとまるでジェットのようにリオルへ突進した。

「速いっ、かわしてリオル！」

「リオ！」

リオルはアクアジェットをかわしきれず吹っ飛んだ。

「すごいパワーだわ。一気に体力を持っていかれた。」

「よし次で決めるぞ！れいとうパンチ！」

「れいとうパンチですって！？ならばリオルメガトンパンチ！」

両者のパンチが激突しあたりを砂埃が覆った…

「「どうだ！」」

「リオリオ…」

砂埃が晴れるとそこには目を回して倒れるリオルの姿があった。

「リオル戦闘不能！よってこの勝負ヒロトの勝ち！」

「やったぁ！ありがとうブイゼル！」

「まさかれいとうパンチが使えたとは…負けたよヒロト。」

アスカは少し悔しそうだが楽しそうに見える。

「よーしこれで勢いもつく！ついにコトブキに上陸だ！」

「「「おー！」」」

初バトル！（後書き）

バトルシーンをはじめて書きました。難しいです…
次はコトブキで新展開！？
というわけで

ポケットモンスター～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

ついに上陸！コトブキシティ！！（前書き）

久々の投稿です。
今回もどうぞよろしくお願いします。
それではスタート！

ついに上陸！コトブキシティ！！

「ついに着いたぞ！ここがコトブキシティか～」
そういっているヒロトはとてもうれしそうだ。
「やっと着いたね！」
アスカは疲れが溜まっているようだ。
「はぁはぁ」
ジュンはひどく疲れているようでひどい息切れをしている。
「どうしたんだよ！体力ねーな。」
ヒロトがそういうと、ジュンは
「仕方が、ない、だろ。俺は、お前と、違って、運動、苦手、なんだから。」
つっかえつっかえで答えた。
そんなジュンを気遣うつもりはないヒロトはこう言った。
「俺さすぐにコトブキテレビに行きたいんだけどいい？走るぜ？」
「私はいいけど、ジュンは？」
「先に行ってて。後で行くから。」
「ＯＫ！じゃあ行こうぜアスカ！」
「うん！」
そういって２人は駆け出した。

「さあ着いた。早くしないと始まっちゃうよ！」
ヒロトが珍しく焦りを見せている。
「何が始まるの？」
「後で言うから、今は２番スタジオに行こう！」

「さあ始まりました。『シンオウＮＯＷ！』今回のゲストはシンオ

ウリーグチャンピオンシロナさんです！」
女子アナの声から始まったテレビ番組『シンオウＮＯＷ！』にチャンピオンのシロナが登場していた。
「どうもお茶の間の皆さんシロナです。」
紹介されたのは金髪の大人な感じの綺麗な女性だった。

「うわっ始まっちゃったよ。」
ヒロトがスタジオに駆け込みつつつぶやいた。
「あっシロナさんだ！綺麗な人だな～」
同時にスタジオに入ったアスカはシロナに見とれている。

「本日は公開収録ということですがどうですかシロナさん、緊張とかしてますか？」
「そんなことはないですよ。」
「そうですか。では早速このコーナーから！……」

1時間半ほどの収録が終わり、シロナが席を立つと、ヒロトが真っ直ぐシロナの元へ向かった。
「あら？何かしら？」
「僕シロナさんの大大大ファンでこうして生で会うために来たんです！」
「あら嬉しいわ。君名前は？」
「僕はヒロトです。後そこにいるのがアスカです。」
「はじめまして。アスカです。」
あのアスカが緊張しているようだ。
「シロナさん！僕の夢、聞いてくれますか？」
「もちろん。何ヒロト君の夢って。」
「僕の夢はいつかシロナさんを倒してリーグチャンピオンになることです！」
そういっているヒロトの目はすごくいい目をしていた。

「あら頼もしい事言ってくれるわね。じゃあ待ってるわ、シンオウリーグで！」
「はい！必ず勝って見せます！」
「そうだ！あなたのポケモンを見せてくれないかしら。」
「いいですよ。出て来いブイゼル！」
「ブイブイ！」
「ブイゼルね。いい目をしているわ。めずらしいわね尻尾が三本もあるなんて。きっとこの子は相当手強い相手になりそうね。」
「ありがとうございます！」
「後あなたのポケモンは？」
「実はまだ一匹しか持ってなくて…」
すこし恥ずかしそうにヒロトが言うとシロナは
「そういうことだったら、このモンスターボールを持っていきなさい。きっと頼もしい仲間になるはずよ。」
そう言ってシロナはモンスターボールをヒロトに渡した。
「いいんですか？ありがとうございます！」
「あなたが私に挑戦してくる日を待っているわ！」
「はい！！」
そういってシロナはスタジオを後にした。がしかし！

「シロナさん！僕とバトルしてくれませんか？」

シロナに挑戦を挑む青年が彼女を呼び止めた。
その青年を見たヒロトは驚愕した。

「兄貴！？」

「えええええええええええ！！！！！！！！」

ついに上陸！コトブキシティ！！（後書き）

以上です。またすこし早い展開ですが暖かく見てください。
それでは以上ダンリックでした！

ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

リュウジVSシロナ

「あっ兄貴じゃん！」
「あれっそういやリュウジさんって旅に出てたんだっけ。」
ここで説明が必要だろう。シロナにバトルを挑んだこの青年はヒロトの兄、リュウジである。彼もまたシンオウリーグ制覇を目指して３年前から旅をしていたのだ。ちなみ彼は１７歳だ。

まだ紹介がされていなかったので紹介する。
ヒロトたちは１４歳である。
この世界は小学校を出るか１２歳になれば旅に出る資格が与えられる。そのまま旅に出るものもいるが中学校へ行くものも多い。
義務教育は小学生までだがヒロトたちは中学校に行き二年で中退して旅に出た。
なぜなら二年で中退する者も多く、もともと3人で決めていたからだ。

「いいわよ。久しぶりね、こんなところでバトルを挑まれるなんて。」
「じゃあやりましょう」

「ここでバトルでどうですか？」
そう言ってリュウジはコトブキ公園のバトルフィールドへやってきた。
するとたちまちシロナを見かけたトレーナー達が集まってきて人だかりができた。
「うわわ、もうこんなに集まっちゃったよ。」
ヒロトはマジかよといった顔をしている。
「当たり前でしょ！あのシロナさんがバトルをしようとしているん

だから。」
そういっているアスカの目はアニメだったらキラキラと輝いている絵が飛び込んでくるだろう。
「おーい」
遠くから声を掛けてきたのは前回ほぼ空気のジュンだった。
「おう！もう大丈夫なの？」
「大丈夫だ。問題ない。（キリッ）」
死亡フラグの代表的台詞を言いながらジュンは答えた。
「あっもう始まるっぽいよ。」

「シロナさん。ルールは3対3で先に全体戦闘不能になったほうの勝ちってことでいいですか？」
「いいわよ。早くやりましょ。」
「行きます！行け！ラムパルド！」
「パルド！」
「へぇラムパルドかぁ。じゃあ私はミカルゲよ！」
「カゲェ…」
「先行は僕でいいですね。行けラムパルド！じしんだ！」
ラムパルドが大きく吼えると地面が揺れ地面に衝撃波が走り、ミカルゲを襲った。
「かわして！」
しかし大きな石に縛られているミカルゲは動きが遅くかわしきれず衝撃波を食らった。
「なかなかのパワーね。今度は私の番よ！ミカルゲあくのはどう！」
「カゲカゲェ！」
ミカルゲの体から黒いオーラが現われ、それを周りに放った。
「かわせるか？ラムパルド。」
「パルド！」
しかしラムパルドも動きが遅くあくのはどうを食らった。
「なんて威力だ。こりゃ早めに決めたほうが良さそうだな。ラムパ

ルドもろはのずつき！」
「パルドオオオオ！」
またラムパルドが雄叫びを上げると頭が光りだし、そのままミカルゲに猛スピードで突進をしてきた。
「シャドーボールでとめて！」
ミカルゲはシャドーボールをラムパルドに放つが、ラムパルドはそれを物ともせずミカルゲにぶつかった。
ミカルゲはそのまま目を回して倒れてしまった。
「まずは一体目です。」
「やるわね。でも次は、この子よ！ルカリオ！」
「ハアアアアア」
「ルカリオですか。ラムパルドじしん！」
また地面に衝撃波が走り、ルカリオを襲った。だが！
「斜め前へジャンプ！」
ルカリオは斜め前へジャンプして衝撃波をかわしつつ空中でラムパルドの上にいた。
「波動弾連射よ！」
空中のルカリオはラムパルドの背中に波動弾を3発打ち込んだ。
「ああラムパルド！」
ラムパルドも戦闘不能になっていた。
「くそっさすがチャンピオン。うまい攻撃をしてくる。」
「ありがとう。バトルで手は抜きたくないの。」
「そうですか。僕も本気でシロナさんとバトルできて嬉しいです！僕の二体目はバシャーモです！」
「シャーモ！」
「行けバシャーモ！ブレイズキックだ！」
「速いわね。ルカリオ受け止めて。」
「ハアアアアア」
ルカリオは手に波動を集中させてブレイズキックを受け止めようとしたがバシャーモのブレイズキックの威力は高く、ルカリオはブレ

イズキックを食らってしまった。
「鋭いキックねルカリオのガードを破るなんて。でも！ルカリオはピンチなるほど強くなるのよ。ルカリオ、気合いパンチ！」
「ならこっちは炎のパンチだ！行け！」
両者のパンチが激突し土ぼこりが周りを覆った視界がはれるとそこにはどちらも戦闘不能になっているルカリオとバシャーモの姿があった。
「ルカリオまで倒すなんて。あなた相当の腕ね。」
「ありがとうございます！最後まで楽しみましょう！」
「そうね。思いっきり楽しみましょう！私の最後のポケモンはガブリアスよ！」
「ガブガブ！」
「やっぱりガブリアスだ。なら僕は長年の付き合いのこいつだ！行けマニューラ！」
「マニュマニュ！」
「さあ行きましょうか。」
「はい！」

リュウジVSシロナ（後書き）

完結は次回になります。
ってゆうか2戦目って5話目と一緒じゃね？
というわけで！

ポケットモンスターDPT～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

決着！　そして新しい仲間！（前書き）

リュウジＶＳシロナ完結と新しい仲間登場の回です。

それではスタート！

決着！　そして新しい仲間！

「マニューラ、先手必勝だ！れいとうパンチ連打だ！」
「マニュ！」
マニューラは素早くガブリアスの懐に飛び込むとれいとうパンチを連打しようとしたがパンチを出したときには既にガブリアスはそこにいなかった。
「なかなか速いわね。でもガブリアスのほうが上みたいね！ガブリアス、ドラゴンダイブ！」
「グオオオオオ」
ガブリアスは空中から風のようにマニューラへぶつかった。
「ニャアアアアア！」
マニューラはドラゴンダイブをかわせず吹っ飛ばされた。
「くそ、マニューラのスピードでも太刀打ちできないのか！？強すぎる…」
「これで決めさせてもらうわ！ガブリアス、ギガインパクト！」
「ギャアアアアア」
ガブリアスが雄叫びを上げるとガブリアスをオーラのようなものが包み、そのままマニューラへ突進した。
「頼むかわしてくれ！頼む！」
「ニュウウウウウウ」
マニューラはさっき以上のスピードを発揮して何とかギガインパクトはかわせたがギガインパクトの衝撃は凄まじく、マニューラは吹っ飛ばされてしまった。
「立て！立つんだ！立ってくれ！」
「ニュウ…ラァ…」
何とかマニューラは立ち上がった。
「よし。これが最後の攻撃だ！れいとうパンチ！」
マニューラはギガインパクトの反動で動けないガブリアスへ渾身の

一撃を打ち込んだ。
「どうだ、やったか？」
ガブリアスはまだ立っていた。しかもまだ体力も残っていているようだ。
「くそっまだ戦えるというのか！？マニューラ！」
指示を出そうとマニューラのほうを見たリュウジの目には目を回して倒れているマニューラの姿が映っていた。
「私の勝ちみたいね、リュウジ君。」
「そうですね。負けました。」
負けを認めたリュウジは急いでマニューラの元へ向かった。
「マニュ…」
マニューラはすまなさそうな顔をしている。
「いいんだ。お前はよくやってくれた。ゆっくり休んでくれ。」
そういってマニューラをモンスターボールへ戻した。
「リュウジ君、ありがとう。楽しかったわ。こんな燃えるバトルは久しぶりだった。」
そう言ってシロナは手を差し出した。
「僕もです。負けちゃいましたけど、いいバトルでした。すっごく楽しかったです！」
そういってリュウジはシロナの手を握った。
すると観客達が一斉に拍手をして2人のバトルを褒め称えた。

「ヒロト…お兄さん負けちゃって残念だったね…」
心なしか悲しんで見えるのは顔を伏せているからだろうか。悲しそうなヒロトを慰めるアスカだったがヒロトの答えは意外なものだった。
ヒロトは顔を上げると目を輝かせこう言った
「やっぱシロナさんはすげーや！あの兄貴を倒すなんて！」

「「えええええええええええ」」

「超元気なんですけど。」
空気第一号候補ジュンは呆れている。
「私のはなんだったのよ！」
アスカは少し怒っているようだが問題ないだろう。
完全に脱力してしまった二人をおいてヒロトはシロナとリュウジの元へ向かった。

「シロナさん！兄貴！すごいよ！あんなバトルは初めてだよ！すごく興奮した！」
「あれヒロト君、見ててくれたの？」
「はい！しっかり見てました！勉強することが多すぎて困りました。」
「しっかり見てましたよ。もしかしたら瞬きしてなかったかも。」
「おうアスカちゃんじゃないか！もうこんな大きくなったのかぁ３年って長いなぁ。」
もう年寄りのせりふを言い出したリュウジにヒロトは
「兄貴もすごいじゃん！あのシロナさんといいバトルするなんてさ！まぁ負けたけど。」
「最後のは余計だよ！」
「リュウジさん、ほかのポケモンも見せてくれませんか？」
「久し振りだね。ジュン君、君もだいぶ変わったね。えっとポケモンね、はいはい。ただいま…
良し出て来い！」
するとさっきの三体とそのほかに三体のポケモンが出てきた。
「左からバシャーモ、ラムパルド、ボスゴドラ、フーディン、ムウマージ、マニューラだ。」
「ほかのポケモンもよく育てられているわね。」
「ありがとうございます。じゃあ僕はこれで失礼します。」
「もう行っちゃうのかよ。」

「負けちまったんだから、また修行しなきゃな。じゃあまたな！」
「「じゃあねー」」
「ところでヒロト君、私のあげたポケモンはもう見てくれたかしら。」
「まだです。せっかくなんで今出してみます。」
「楽しみだなぁ」
「ってちょ、いつの間にポケモンなんてもらってんの！？」
「まぁまぁいいじゃない」
「シロナさんがそういうなら…」
「それじゃあ行きますそれっ！」

「がうがう」
「フカマルだ！やったやった！ありがとうございます！」
「ヒロトは昔からフカマルほしがってたもんな。おめでとう！」
「ありがとうジュン！シロナさんもしかしてこのフカマルってあのガブリアスの卵から生まれたフカマルなんですか？」
「察しがいいわねヒロト君。そのとおりよ。あのガブリアスの子供といったところね」
「うわあのガブリアスの子供なのか。すごいなお前！」
「ヒロト、この子に名前を着けたら？」
アスカがそう提案すると
「いいじゃんそれ！うーん何がいいかな…そうだ！ガイアってのはどうよ！」
「賛成だ」
「私も」
「私も賛成ね。大事に育てて頂戴ね。」
満場一致でこのフカマルは晴れて『ガイア』と名づけられた。
「よろしくなガイア！」
「がうがう！」

決着！　そして新しい仲間！（後書き）

次回はバトル大会を開催します！
ガイアの初バトルと久々の登場ブイゼル君です。
ということで以上ダンリックでした！

ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

ガイア初バトル！（前書き）

お久しぶりです。
今回はブイゼル君久しぶり登場とガイア初バトルの回です！
それではスタート！

ガイア初バトル！

「いだだだだだっ」
この日の朝はヒロトの悲鳴から始まった。
「わわわっ何だぁ！？」
ヒロトの悲鳴を聞いたジュンが飛び起きた。
「こらガイア痛いだろ！耳をかじるなって！」
「なんだヒロトか。仲がよろしいこったね」
「んなこといってないで助けてよ～」

「すやすや…」

そんな2人の会話を物ともせず眠るアスカ。
「だぁ！やっと外れたよ…あー痛かった。」
「がうがう！」
「まったくもー」
「仕方ないだろ。まだガイアは赤ちゃんみたいなモンなんだよ。だからヒロトと遊びたいのさ。」
「そうなの？」
「がうがう！」
「そうかそうか！良しじゃあ朝ごはん食ったら遊んでやるからな！」
「行けリオル…メガトンパンチ…ムニャムニャ」
「アスカってさこんなに寝るやつだっけ？」

「「「ごちそうさまでした！」」」
「良し！じゃあガイア遊ぼうか！」
「がうがう！」

「ストップ！その前にさ、俺達のポケモンをガイアに紹介しておきたいんだけど」
ジュンの提案にアスカは
「賛成だよ♪これから一緒にいるんだもんね。」
「俺も同じく賛成だよ」
ヒロトも快諾した。
「まずは俺からだな。出て来いグレッグル！」
「レッグ！」
「じゃあ次は私ね。リオル！」
「リオリオ！」
「最後はブイゼルだ！」
「ブイブイ！」
「どうだガイアこいつらがお前の仲間達だ」
ヒロトはガイアにあわせてしゃがんで話している。これが彼なりの接し方なのだろう。
「がうがう！」
「ガイア、嬉しそうね」
そういっているアスカも嬉しそうだった。

「おぃ！」
「気に入ってくれたな！よかったよかｔｔ「おーーーーい！！！」
「ビックリしたぁ。どうしたのブイゼル？」
ヒロトのせりふをかき消すほどの大声を出したブイゼルはキレているようだ。
「何でだよ！ボールからなんで出してくれねーんだよ！リュウジとシロナのバトルすげー見たかったのにさぁ、あと俺ってしゃべれるんだからもっと活用しようぜ！それにｓ（ｒｙ」
「要するに何が言いたいの？」
マシンガンのようにしゃべるブイゼルのせりふを今度はヒロトが制した。

「俺をボールから出して旅するってのはどうだい！」
「なるほど…ジュンはどう思う？」
「いいんじゃないかな。でも人前でブイゼルにしゃべられるのは困るけど。」
「アスカはどう？」
「賛成ね。もっと賑やかで楽しくなっていいじゃない！」
「だってさ。」
ドヤ顔のブイゼルにヒロトも
「じゃあブイゼルは基本ボールから出すことにするよ。」
「頼むぜ！」

「さあやっとガイアと遊べるな。ん？どうした？」
ガイアはすぐ近くでやっているバトルに釘付けになっている。
「ガイアはバトルをやってみたいんじゃない？」
アスカがそういうとヒロトはハッとしたようにガイアに言った。
「そうなのか？」
「がうがう！」
「わかった。じゃあやってみるか！」

「さて相手はどうしようか…」
「リオルやグレッグルじゃあ強いよね…」
ヒロトとアスカが困っているとジュンが
「無理にトレーナーと戦う必要はないんだ。野生のポケモンでも十分に練習にはなると思うよ」
「「なるほどー」」

「じゃあそうだな…あのビッパでどう？」
「OK！ガイアいけるな？」
「がうがう」

「ねぇガイアの技を確認したほうがいいんじゃない？」
「そうだな！サンキューアスカ」
「なになに…体当たり、りゅうのいかり、じ、じしん！？マジかよ！？」
「この子ししんが使えるの！？」
「予想ガイです」
「なにいってんだよ驚きすぎておかしなこと言ってるぞ」
「とにかくやってみよう。ガイアじしんだ！」
「「ドキドキ…」」
「がああう！」

「あれ？何も起こらないよ？」
「もしかしてまだ子供だからじしんが出せないんじゃ…」
「なんだそうだったのか。でもいつかは使えるようになろうな！」
「ヒロトって親バカ？」

「さぁ気を取り直して、ガイア！たいあたり！」
「がう！」
ガイアは親譲りのスピードでビッパに体当たりをかました。
「続いてりゅうのいかり！」
「がああああ！」
ガイアの口から光線が発射され、ビッパに直撃し、ビッパは逃げていった。
「やったなガイア！俺達の初勝利だ！」
「がうがうがう！」
「やっぱり親バカだと思わない？ジュン」
「僕もそう思う。」

ガイア初バトル！（後書き）

次回こそバトル大会を開催するので待っててください。
あとブイゼル君ごめんね。
ということで以上ダンリックでした！

ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

コトブキグランプリ開催！？（前書き）

ついに１０話目です。
バトル大会なんて無茶をしてますが是非読んでください。
ではスタート！

コトブキグランプリ開催！？

「さぁ今年はこのコトブキでビックなイベントが開催されるぞ！その名もコトブキグランプリだ！自分の　腕に自身のあるキミもまだまだ慣れてないキミもこのバトル大会に参加しようぜ！」
アスリートのような人がテレビコトブキの大きなビジョンをハイテンションで駆け抜けた。
「へーコトブキグランプリかぁ。いい修行になるかもな！良し出よう！」
あっさりとグランプリ出場を決めたヒロト。
「面白そうね、リオルをさらに強くするためにも出るっきゃないわね！」
「そうだな。きっといい体験になると思うよ。だって僕達、３人としか戦ったことないだろ」
ヒロトに続きアスカ、ジュンも出場を決めた。
「そうと決まったら早速…」
「エントリーね！」
「ゑ？特訓じゃないの？」
不思議そうにヒロトは言った。
「特訓よりエントリーが先に決まってるじゃない！エントリーできなかったら意味がないわ！」
「なぁるほど」
「大丈夫なのか？」

コトブキグランプリ受付

「あのー僕達コトブキグランプリの受付をしたいんですけど…」
「はい！まずお名前を」
「ヒロトです」

「ジュンです」
「アスカです」
「ヒロトさん、アスカさん、ジュンさんですね。受付完了です。バトル大会は明後日となります。」
「「「わかりました」」」

「よし！エントリーも済んだことだし、特訓だな！」
「私が言わなかったら出場できなかったかもしれないのに何か言うことないかしら？」
「え？そうか、ありがとうアスカ。」
「なぁこれからバトル大会までの特訓は個人でやるってのはどう？」
ジュンがまたアイディアを出した。
「そうね。私達今はライバル同士だものね。」
「いいんじゃないか？」
2人も承諾したので3人は別の方向に歩き出した

～ｓｉｄｅヒロト～
「よーし基本的にブイゼルを主体にして戦う感じで行こうと思うんだけどどう？」
人がいないのでブイゼルに喋りかけるヒロトだがブイゼルは答えない。
「どうしたんだよブイゼル？」
「うわあああああん！そうだよ！これだよ！こんな感じの状況を話せるようになってからどれほど待　っていたことか！」
感極まったブイゼルは目からハイドロポンプ状態だ！
「そ、そうだったの！？まあ嬉しそうで何よりだよ」
「ありがとうヒロト。よし作戦を考えようじゃないか！」
「俺はアクアジェットを主体に動きで翻弄するバトルをしたいと思っているんだけど」
「そうだな…いい考えだと思うぜ」

「よし！じゃあバトルが始まったら…」

３０分後…

「キタアアアアアアアこれでいいんじゃないか！」
ヒロトが雄叫びを上げた。
「いいなこれ！かっこいいしいいんじゃないか！」
ブイゼルも興奮しているほどのすばらしい作戦のようだ。
「後はガイアだな…たいあたりとりゅうのいかりじゃ心細いな…じしんは使えないと考えていいだろう　から…」
「もうひとつ技がほしいってとこだな」
「フカマルは何が覚えられるんだ…？あなをほるとかいいんじゃないか？ブイゼル？」
「あなをほるか…技をかわしつつ攻撃できるしいいんじゃないかな。」
「ガイア！あなをほるとかできたりする？」
「がう？がう！」
ヒロトの言葉を理解したガイアは見事に穴を掘って地中に隠れた。
「どこだガイア？出て来い！いでででで！」
ヒロトの後ろから出てきたガイアがヒロトの耳をかじったのだ。
「やめろガイア！痛い！痛い！」
「がうがう！」
「まったくもう耳は噛むなって言ってるのになぁ…」
「おいヒロト！ガイアってあなをほるができてるんじゃないか？」
「言われてみれば！すごいじゃないか！」
「がうがう！」
「良し！これでバトル大会はいただきだな！ブイゼル！ガイア！」
「ああ！」
「がう！」
「ジュン、アスカ！負けないからな！」

1日後…

「さぁついに明日はコトブキグランプリだ！皆がんばってくれよ！」
またあのアスリートのような人が駆け抜けた。
「今日は作戦の確認からだな！…」
ヒロトは今日も燃えている！

「グレッグル！明日は絶対勝つぞ！」
ジュンも珍しく熱い！

「リオル！ヒロトにはリベンジするわよ！」
アスカもリベンジに燃えている！

そしてついに大波乱のコトブキグランプリが開幕する…

コトブキグランプリ開催！？（後書き）

次は相当大変になりそうですな…
がんばりますので次回もお楽しみに！
以上ダンリックでした！

ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

コトブキグランプリ　出会いと一回戦（前書き）

久しぶりの投稿です。
今回から少し長い（かも知れない）コトブキグランプリが開催です。
酷いバトル描写かもしれませんが何とか多めに見てください
あと新キャラ登場です。

それではスタート！

コトブキグランプリ　出会いと一回戦

「さぁやってまいりました！コトブキグランプリ！この大会で優勝するのは誰だっ！」
コトブキテレビのキャスターらしき人の熱い掛け声とともにコトブキグランプリの日の朝は始まった。

「やったぁ…優勝だ！…　ハッ！　なんだ夢か…」
「どうしたんだヒロト？」
へんな寝言を言いながら飛び起きたヒロトにブイゼルが心配そうに話しかける。
「あぁ…コトブキグランプリで優勝する夢を見ていた…と思う。」
「おはよー」
アスカはもう起きて着替えていた。
「優勝できるのは夢のだけか？ヒロト」
「朝っぱらからなんだよーやな奴だな」
「ジョークだよ。」
ジュンも先に起きているようだ。
「ジュンはすぐにそんなジョークを言ってられなくなるわよ」
「何でだよ？」
「だって私にコテンパンにやられてしゃべることもできなくなるんですもの！オーホッホッホッホ」
「何を！後その笑い方何？」
「ちょっとやってみたかったから」
「アスカだってすぐにその笑いは泣き声に変わるさ」
「泣くのはヒロトのほうよ！」
既に3人の目からは火花が散っていた。
「さぁ着いたここがコロシアムか。でかいな…」

ヒロトはコロシアムに圧倒されている。
「ほんとおっきいねー」
「ここでグランプリをやるのか…」
「行こうか！」
「「うん！」」

～コロシアム内選手控え室～
「それでは今大会のルールを説明します。使用ポケモンは二体。持ち物は自由。伝説、幻のポケモンは禁止です。バトルは1対1で交代は自由。先にすべてのポケモンを戦闘不能にした方の勝利です。なおダブルノックアウトは引き分けとします。以上です」
「ほう1対1か。面白くなりそうだ！なあブイゼル！」
「ああ！俺も燃えてきたぜ！」
「ねぇ！ブイゼルが喋っていいのは私達といるときだけでしょ！気をつけてよね！」
「ごめんなさい」

「ねぇ君。そのブイゼル…」

「わわわどうしよう…喋れるのがばれたかな…」
「ねぇどうしたの？」
「いやいやなんでもないよ（まさか気づかれるわけがない）何か御用？」
「いや君のブイゼル、尻尾が3本なんだね。すごく珍しいからちょっと見せてもらいたいなって。
あ！僕、カイトです。よろしく。」
「俺はヒロト！よろしく。」
「そのブイゼルはヒロト君のなの？」
「そうだよ。小さいころからの友達なんだ！」
「へぇー。ほかに何か持ってるポケモンは？」

「こいつだけだよ。出てこい！ガイア！」
「がうがう！」
「ガイアって言うんだ。まだ小さいけど結構やるんだぜこいつ」
「よろしくね！ブイゼル、ガイア！」
「カイトのポケモンも見せてよ。」
「僕のはこの二体だよ！」
「チリーン♪」
「ポチャポチャ！」
「チリーンにポッチャマだよ。」
「可愛いじゃんか。」
「ありがとう。ところでヒロト君この大会で勝てる自信はある？」
「もちろん！自信がなきゃできるものもできなくなっちゃうと俺は思う。」
「かっこいいね！なんか」
「そう？親父の受け売りなんだけどね」
「おーいヒロトもう1戦目始まるぞ」
ジュンとアスカがカイトと話していたヒロトを呼んだ。
「あれ？その子は？」
アスカがカイトに気づいた。
するとカイトは頬を赤らめながら
「カッ、カイトです。よ、よろしく」
「おいどうしたんだよ、顔赤いぞ。」
ヒロトが不思議そうに聞いた。
「女の子と話すことってあんまりないから…」
「なんだ照れてたのか。あはははは」
「笑わないでよ！」
「カイトの対戦相手は？」
ジュンが割り込んで聞いてきた。
「えっと…この人だ。」
「がんばれよ。」

「うん！」
「あのさ…次の次はヒロトのバトルだよ。急いだほうがいいよ！」
アスカがそう言うとヒロトは
「もうそんな時間か！じゃあ行って来るぜ！」

～コロシアム　バトルフィールド～
「続いてのバトルは赤コーナーマサゴタウン出身のヒロト君対青コーナーハクタイシティ出身のショウタくんだ！」
ついにヒロトのバトルがやってきた。
「大丈夫。こいつらを信じればきっと勝てる！よし！」
「それでは両者ポケモンを出してください！」
「いけ！ガイア！」
「がう！」
ヒロトはガイアを一番手に選んだ。一方ショウタは
「いけ！パチリス！」
「パチチパ！」
「電気タイプのパチリスと地面タイプを持つフカマルではフカマルの方が有利だが…」
「ではコイントスで先行を決めます。赤の面が出れば赤の先行、青が出れば青の先行です。」
コイントスでは青が出た。
「それではバトル開始！」
「パチリスでんこうせっか！」
パチリスは高速でフカマルにぶつかった。
「大丈夫か？よしたいあたりで反撃だ！」
「がう！」
「パチリスかわせ！」
パチリスはすばしっこく動きたいあたりをかわした。
「速いな…ならこいつでどうだ！あなをほる！」
「がう！」

ガイアは素早く穴を掘って地中に隠れた。
「どこから来るかわからないぞ。気をつけろ！」
パチリスは集中して地面を見回している。
「足元がお留守だよ！いけ！」
パチリスの真下からガイアが出てきてパチリスにパンチをかました。
「パティィ」
「よしいい感じだな！このまま行くぜ！」
「こうかはばつぐんか…でも遠距離の攻撃なら！パチリススピードスター！」
「パチ！」
パチリスは口から星型の光線をいくつも出してガイアめがけて飛ばした。
「くそ！かわしきれない！」
「がうううう！」
「やっぱりフカマルは遠距離攻撃ができないみたいだ。スピードスター連射だ！」
「引っかかったな！」
「なに！？」
「ガイア！りゅうのいかり！」
ガイアの口から放たれたりゅうのいかりはスピードスターをかき消してパチリスに命中した。
そしてパチリスは目を回して倒れてしまった
「俺はお前の罠にかかっていたわけか」
「そう！名づけて『フカマルは遠距離攻撃ができないだろうと思い込ませておいて、その攻撃をりゅうのいかりでかき消しながら相手にぶつける！』作戦！」
「長っ」
「パチリス戦闘不能！フカマルの勝ち！」
「良しまずは一体！」
「なかなかやるみたいだ。なら次はこいつだ！」

「ムクバード！」
「ムクバードか…いやなやつが出てきたな…」
「ムクバードかげぶんしん！」
ムクバードは7体ぐらいに分身した。
「がう？がう？」
ガイアは戸惑っている。
「落ち着けガイア。りゅうのいかりで全部なぎ払うんだ！」
「がう！」
「そんなんじゃ駄目だぜ！ムクバードつばめがえし！」
ムクバードは空中で宙返りをした後急降下して低空飛行でガイアの背中に突進した。
「がうううう！」
「ああガイア！」
ガイアは目を回して倒れこんでしまった。
「フカマル戦闘不能！」
「このムクバードつばめがえしが使えるのか…」
「どうだ！後一体だぞ！」
「俺のポケモンはこいつだ！」
「ブイブイ！」
「いくぜブイゼル速攻だ！アクアジェット！」

コトブキグランプリ　出会いと一回戦（後書き）

前編なんでここまでです。
次は決着をつけます。
新キャラはカイト君のほうです。ショウタではありません。
次回も是非見てください！
以上ダンリックでした！

ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～　次回もほっとけない！！

コトブキグランプリ　それぞれの一回戦（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。
結構頑張って書きました。
あとジュンのバトルを初めて書きます。

それではスタート！

コトブキグランプリ　それぞれの一回戦

「行くぜブイゼル速攻だ！アクアジェット！」
「ブイ！」
ブイゼルは体に水をまとい猛スピードでムクバードに突進した。
「かわせ！」
しかしムクバードはかわしきれず上へ吹っ飛ばされた。
「よっしゃ！作戦通りだ！そのままジャンピングれいとうパンチだ！」
ブイゼルはムクバードをかち上げて空中でそのままれいとうパンチを仰け反っているムクバードの胸に打ち込んだ。
「クバード！」
勢いよくムクバードは地面に叩きつけられた。
「いい感じだ。『アクアジェットで敵をかち上げてそのまま空中で相手にれいとうパンチを打ち込む』作戦も成功！来てる来てる！」
「なかなか面白い事してくれるな！こっちも負けてらんないぜ！」
「仕掛けてくるぞ！構えろ！」
「でんこうせっか！」
ムクバードは正に電光石火の如く体当たりしてきた。
「受け止めろ！」
ブイゼルは体当たりをガードしようとしたがムクバードは急上昇してしまった。
「どういう…ことだ…？」
「そのスピードのままつばさでうつ！」
ムクバードは急上昇し、そのスピードのままブイゼルに翼をぶつけてきた。
「どうする…そうだ！ブイゼル、ジャンプ！」
ブイゼルは翼があたる直前にジャンプして翼をかわした。
「なんだと！？」

「そのままソニックブーム3連発！」
「ブイ！ブイ！ブイ！」
ブイゼルは無防備なムクバードの背中に彼にしかできないだろうソニックブーム3連発を放った。
「ムクバード！」
ムクバードは目を回して倒れた。
「ムクバード戦闘不能！よって赤コーナーヒロトの勝利！」
「よっしゃあああああああ！！！」
「一回戦第4試合はマサゴタウンのヒロト君の勝利だあああああ！おめでとう！」
「ありがとうございました。いいバトルでした。」
ショウタがヒロトにそう言った。
「こちらこそ楽しかったです！」

～コロシアム内選手控え室～
「おめでとうヒロト！まずは一回戦突破だね！」
控え室に戻ったヒロトにまずアスカが声を掛けた。
「よかったなヒロト。」
次にジュンが
「おめでとうヒロト君、すごかったよ。」
そしてカイトがそれぞれヒロトの一回戦突破を称えた。
「ありがとう。3人とも」
「次はアスカの番だな。」
「うん！行って来る！」
「「「頑張って！」」」

～コロシアム　バトルフィールド～
「イワーク！」
「イワーク戦闘不能！よって青コーナーアスカの勝利！」
「第六回戦はマサゴタウンのアスカちゃんが華麗なバトルで一回戦

を突破したぞ！」

〜選手控え室〜
「なかなかいいバトルだったぜ！アスカ！」
ヒロトが真っ先にアスカに言った。
「あんな攻め方があったのか…」
ジュンは感心しているようだ。
「ア、アスカさん。す、すごい、バ、バトルでした。」
カイトは相変わらずの様子。
「ありがとう。あれだけ特訓したんだから勝たなきゃね。」
「次行って来る！」
ジュンが次のバトルだ。
「おう！行って来い！」

〜バトルフィールド〜
「次は赤コーナーはマサゴタウンのジュン君、青コーナーはキッサキシティのノゾミさんだ！」
「コイントスで出た色の方が先行です。…それでは青コーナーの先行でバトル開始！」
「いけ！ユキカブリ！」
「カブリ！」
「俺はコリンクだ！」
「リンク！」
「ユキカブリ、こおりのつぶて！」
ユキカブリは手のひらに少し大きな石ぐらいの氷を作りコリンクに素早く投げつけた。
「コリンク、チャージビーム！」
コリンクは口から電撃のビームを発射した。
両者は打ち消しあったが砕けた氷がコリンクに降りかかった。

「リンクリンク！」
「落ち着くんだコリンク！まずはじゅうでんだ！」
コリンクは体に電気を溜め込んだ。コリンクの体からは火花が出ていた。
「じゅうでんで電気技の威力を上げて一気に片をつける気だわ。それならユキカブリ、ふぶき！」
ユキカブリは口からいてつくような冷たい息をコリンクへ吹きかけた。
コリンクはじゅうでんの途中で動けず吹雪をまともに食らった。…
かに思われたが！？
なんとコリンクの姿が霞み消えてしまったのだ。
「何が起こったの！？」
「みがわりを使ったのさ！コリンクスパークだ！」
コリンクは電気を放出しながらユキカブリに体当たりした。
「カブー！」
効果がいまひとつとはいえ電気をかなり溜め込んだ後のスパークは強烈でユキカブリは目を回して倒れてしまった。
「ユキカブリ戦闘不能！コリンクの勝ち！」
「もしかしてチャージビームとこおりのつぶてが打ち消しあったときに入れ替わったのかしら？」
「その通りです。」
「子供だと思って舐めてたみたいね。私の二匹目はダグトリオ！」
「なるほどダグトリオですか。ならばコリンクかみつく！」
「電気タイプのポケモンが地面タイプのポケモンに突っ込んでくる！？どういうつもりかしら？だったらダグトリオ！すなじごく！」
いきなりコリンクの足元の砂がコリンクを囲うように舞い上がった。しかしまたもコリンクが霞んで消えてしまった。
「コリンクかみｔ（ｒｙ　じしんよ！」
ダグトリオが鳴き声をあげると地面がゆれ、衝撃波が走り、コリンクに直撃した。

「リーンク！」
「コリンク戦闘不能！ダグトリオの勝ち！」
「読まれてしまっていたか…俺の二匹目はグレッグルだ！」
「…ケッ」
「一気に決めてしまいましょう！あなをほる！」
ダグトリオは穴を掘って地中に隠れた。
「グレッグルいけるな！かわらわり！」
「…ケッ、ヌン！」
なんとグレッグルは足元から出てきたダグトリオを難なくかわし、一体の頭にかわらわりを叩き込んだ。
「何ですって！？」
しかしまだダグトリオは戦えるようだ。
「もう一度あなをほる！」
「どくづきで止めだ。お前なら簡単だろ？」
「レッグ！」
なんとまたもダグトリオをかわしたグレッグルは目にも留まらぬスピードでダグトリオにどくづきを決めた。
「ダグトリオ戦闘不能！グレッグルの勝ち！よって勝者、赤コーナージュン！」
「なんと言うことだ！ジュン君のグレッグルが圧倒的力を見せ2回の攻撃のみでダグトリオを倒してしまった！」
「あなたのグレッグル強いのね。しかも半端ではなさそう。次は必ず勝つわ！」
「また受けて立ちます！」
そういって2人は握手をした。

～控え室～
「おいジュン！グレッグルまた強くなってんじゃねーの？」
「元からかなり強かったけどまた強くなってるわね」
「すごかったなぁ、かっこよかったなぁ。グレッグル」

「俺は？グレッグルばっかじゃんか！」
「まあまあとにかく一回戦突破おめでとう！」
「ありがとうアスカ。」
「さて最後はカイトだな。絶対勝って来いよ！」
「もちろん！」

「えーとすいません！皆さん！今日は予想より時間がかかってしまいましたので本日はここまでとなります。明日は一回戦の残りと二回戦を行います。」

「だってさ。残念だな、カイトのバトル見たかったのに…」
「そう落ち込むなってヒロト。お楽しみは後の方がいいだろ。」
「そうだな！」

そしてコトブキグランプリは2日目を迎える…

コトブキグランプリ　それぞれの一回戦（後書き）

次回はついに
「どういう…ことだ…」
のカイトさんではなく、女の子が苦手なほうのカイト君の初バトルです。

今回はちょっと台詞をお借りした作品が在るんですがその台詞が
「どういう…ことだ…」
「ありがとうございました」「いいバトルでした」
というものですがわかった方いますか？
もしわかった方は感想かなんかでお知らせください。
それでは以上ダンリックでした！

ポケットモンスターＤＰＴ～輝石の蒼光～次回もほっとけない！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3736w/

ポケットモンスターＤＰＴ　～輝石の蒼光～

2012年1月11日23時53分発行